平新報

発行日　十日発行
毎月一回
編輯兼発行印刷人
山野辺庄吉
福島縣石城郡小名浜町大字岩出字向二八
発行所　平新報社
一部　定価拾円
送料当分の内八円
広告料研討中

再刊第一號に題す

山野邊庄吉

平新報は大正十四年八月二十五日第一号を發刊し、昭和十五年九月五日附二百六十号を以つて休刊しました。（私は敢いて休刊と申します、私には休刊の意志は毛頭もなかつたのですが時の平警察署特高から強制的に廢刊されたのでした）故に今回再刊に際し号を逐ふて第二百六十号から第二百六十一号とします、第三種郵便物認可は大正十四年十二月一日附で認可となり休刊最終号第二百六十号迄持續して居りました……その後規則の變更もある樣ですから再確認をうけるなりその手續をとる心算です、それは此の号に間に合ひませんので郵送切手は八圓を拂ひます。

再刊するに當り、題号の木版ですがこれは加納活版所にあつけて居つたのですが見當らん相で三猿文庫主諸橋元三郎氏に書いてもらいました、次に第一号から第二百六十号迄本紙發行に協力し下さつた人々に紙上感謝の意をさゝげます。

故村上龜之助翁、辯護士山野邊義政氏（先の題号を書いて下さつた）小名濱町會議員橋本佐多壽氏、平市長谷川正夫（兵衛氏）、藤田田孝一氏（所在不詳）、宍戸武雄氏（平市鎌田町）、故宍戸寛氏（武雄氏實弟戰死）、畠山發藏氏（所在不詳）、故安藤信義氏、志賀正近氏（茨城縣多賀郡松岡町上手綱字千代田）、蘂谷高一氏（平市七丁目蘂谷洋服店主）、鈴木寅雄氏（小名濱町岩出）、以上（山野邊辯護士は別格）で社員として協力して下さつたのでした、他血族社員はありましたが略します、本紙は初め白紙で臨みましたが、だん／＼當時磐中同窓會の機關紙として發行致して居りましたので當時の同校同窓會員關内正一氏、諸橋元三郎氏、他會友諸彦、磐城劍道會、磐城柔道有段者會、磐城弓道會、廣告主、購讀者、寄稿家各位に心から謝意を表し、事、更めて私の平新報再刊の心境とその辭を申し上げて戴きます。

一、在平新聞では中道を步んで居るものはない、事をまげて報道して居るものが多い、勿論當分月一回であるから迅速な報道は本紙として出來得ないから批判的になります。

一、最近健康を害し重勞働に堪え得ない、今後重勞働をやれば長命は出來得ないと醫師から注意された、事に生命問題である。まだ／＼人の親としての責任がある。故に心身ともに積健を必要とする、だからとて農村ではブラブラして居らるものでない事は都會人に判つて呉れまいが想像はして呉れるだらうと思ふ。

一、それで多年念願して居つた平新報の再刊を決意したのは約半ヶ年前であつたが、なか／＼家庭と農事の都合上とりかゝれず、二ヶ月前それにかゝつたのだが國會が解散と來て改正選擧規則をみると平新報の再刊は規則上出來得なくなり、義弟菊地功氏に經營さして遣く湯本内郷新聞紙上で挨拶して居つた樣な次第です

一、今更經營方針とか主義主張抱負などは申し上げません。大方の諸彦よろしく御願ひします。

◎地方文化の發祥地◎

舊玉川村附近の名所と古歌の紹介

野田の玉川、野田の入江岩城々主の古城住吉館跡あり、島館、伊達四十八館の一、岩出舘跡、其の他林城金成城の跡がある。（金成城主の末孫は稍葉氏と傳へられ）現に金成に居住して居る。由來、地方文化の發祥地とされる舊玉川、高久には古跡が多い事は事實がもしのを云ふ。

夕されば汐風越して陸奥の野田の玉川千鳥なくなり
新古集能因法師

來る人も勿來の關の呼子鳥こひて別るゝ野田の玉川
續古今集　俊成卿

陸奥の野田の玉川見わたせば汐風越して凍る風影
同　順德院

五月雨は夕しほながら陸奥の野田の玉川淺き瀨もなし
續後拾遺集　鴨裕夏

玉川や風も出てこそ夕なみにやく聲爽き友千鳥かな
同　細川高國

陸奥に湧くといふなる玉川のたまさかにこそあひ見てしかな
新勅撰集

米反收六石を目標

―土に生きる者の喜び―

岩出の山野邊清さん

地方切つての米造りの名人小名濱町岩出字向小名濱町農業會委員の現職に在る山野邊清氏はその心境と希望を左の如く語つて居る。

增收に必要な事は自分の土地を良く知る事です、次に其の土地に適した品種の撰擇次に土地に適した耕作です、以上が三要素とも云います、私は水稻と云ふものは自然の野生の植物であつたのが人工を加いてかいつて不自然となり追いには不捨粒並びに倒伏に導く樣になります故に余り草出來をさせず完全な種質を望み度いと思います、而し天候にも相當の關係をもつて居ります故其の點も考察し管理せねばなりません、私も本年は豐作の天候に惠まれ現在の豫想では昨年以上の收穫を期待して居ります、而し本年は妻の病氣の爲め多少の欠点は有りますが、氣候の好調の爲め回復しました、私の希望は今後三ヶ年計畫で反收六石を目標に努力する算りです、それと同時に一般の農民にも指導し增產に勵み國家の食糧自給に邁進したいと思います

赤井嶽登山の印象

筆者は祈願の筋（平新報再刊と關内正一氏當選）あつて御祭りの前日登山した祈願そのものより住職上野頼榮氏の現境を知りたかつた、幸い上野氏に居られたその折登山記を書いて居ればよかつたのだが選擧に熱しておぼろになつてしまつたが心に殘つて居る事は上野氏と對談して筆者がおくれをとつた事である、劍道の試合なら氣合負けといふ所である、澁沼龍輔、小野義一、澤田源次、馬目武之助等の高木松吉の推薦ハガキが會談最中配達された事だ、木田藤次郎氏の筆で趣沼氏の署名捺印で高木松吉候補キケンにつき云々とあつた、旭上人の墓參もした大庫裡が落成に近い樣だ、登山道路兩側拾間は赤井常福寺の所有な相だ、檜、杉は何百年も經つて居るだらう、なかに樅の木が一本か二本しかないのには意外だつた、又途中神武天皇神社があるのにはこれまた變な感じがした、上野師との一問一答は同行の菊池功さんが書く譯けだつたが同氏が書てない、要は上野氏は二度應召して生死の境を越いて人生觀、哲學觀が宗教家なるが故に撤底して居る事だ、俗に云ふサトリを啓いて居る事だらふ、隨分應召をうけて生死の境を通り越して歸還した日本人に遇つて居るが彼等は何のために生死の境を通り越して來たのか判らぬ、私利私慾、我田引水、今日あつて明日なき人生を知らない、人は棺を蓋ふて初めてその眞價を知るとか盛者必滅、會者定離、未來卒！、卒は秀えず赤井嶽、水は濁し夏井川、こゝ磐陽の學舍に、渦田毅三郎先生の龍燈の研究も思ひ出して來る、途中に何とかいふ梨畑の見ハラシの良い、モギ立ての梨を食ひながら下界の炭礦の煙りや選擧逐鹿の形相に想ひを致したとき誰れか世道人心の頽收、仁義道心、法律道德、宗教、土から產れて土に育まれ、土に入る、米即ち農民の努力に感謝し居るものありや、酒も米が原料じやないか、梨造る人も米を食はずに生きて居られまい。其處で人間生活には衣食住だ、その衣食住三者にも欠けてはならぬ……がその衣食住安定さすのが政治だ、生活を離れて政治がない、生活即ち政治……だがこの人生生活中に精神、心の生き方がなければならぬ、所謂正しく生きる事、法律以上道德人情に生きねばならぬ、筆者は宗教家ではない佛教、キリスト信者でもない、正しく生き拔く……が今後平新報を再刊してペンを以つて立つ以上破邪顯正の方針を以つて社會の木鐸として自己滿足を通り越し人生五十有余歲の經驗を生かし本社の經營に當らん事を誓つて（新しい）モギ立ての梨の實を味ふて、今だに味覺の印象を殘して居る。（山野邊眞立）

社告

箱崎貞二

右本社員として社務に從事致しますからよろしく御願ひします

平新報社

急告

山野邊庄吉

菊池功氏の經營して居る湯本内郷新聞社とは爾後關係を絕ちました

平と岩出

何事でも、地名でも有名になれば良いといふなら、平は平事件で國會は勿論、米國まで知れた相だ、春秋の論法を以つてすれば共產黨のため平は有名になつた譯けだ。

共產党で思ひ出すが選擧殊に立會演說會の折、ヤジリ方は本當に人らしくない狂慘的だ、内鄉での如きは小石を以つて入つて居た相だ管理委員の當を得たゝめ慘狀は未然に防いた、内鄉や湯本等は立會演說は衆間にすべきではある、いち／＼その理由を說明すべきでなく、賢明な管理委員は百も承知だらふと思ふ。

悪い意味で岩出は四年前老祖夫妻殺しで有名になつたがあまり結構でない、然しその不名譽は去り右に反し清さんは米造りで縣下、天下に有名になつた、その岩出は筆者の居住岩出で小字も同じ向です、筆者のプライドとする所であり、今度平自警公安委員となつた辯護士山野邊義政氏が岩出々身である事も誇りとする。

選擧の跡

磐崎村教育委員

當選	渡邊英雄	一、一四三
	御代千代	一、〇六二
	松崎彌一郎	九九五
	瀧牧太	八八五
次点	吉田孝平	四六三
	星スミ子	二三二

コサ落しを斷行した

―住吉區長高萩政記氏

地方から善處を稱揚さる―

小名濱町住吉區長高萩政記氏は千五十町步の灌漑の鮫川土地改良區の理事、小名濱町農業委員の要職に在り大字住吉は區長は任期一ヶ年としてきめてなかなかやりたい仕事もやり得ぬ、處が公平無私な同氏は今回コサ落しを敢行して部落内は勿論他大字からも何十年間もやり得なかつた、氏の努力と誠心誠意その行を善處した手腕と力量には感謝の意を表されて居る、郡内至る所へ行つてもこの我田引水的なコサがのさばつて居る、これ增產に行通に一番の敵であり、行通防害である、警察は行通取締りがある、事業だから先になつてやるべきだがやらない、コサ落しの規則はなからふが行通取締りの規則はある筈である、自分ばかりよければよい、他は暗くなつても稻や畑作物が日影物になつてよいといふ如き心の持主は賢に公德心のない事でこういふ輩には規則を政府にこしらいさせてやる外に術がないからこの立法運動が展開される氣運になつて居る。江栗山野邊良助氏、岩出山野邊義輝氏諸氏どうですか

祝　平新報再刊

小名濱町　齋藤晃

磐崎村　大平正次

赤井嶽常福寺　上野賴榮

平市　諸橋久太郎

勅使、流鏑馬(やぶさめ)
造船の神住吉神社
十三日大例祭執行

小名濱町住吉に鎭座まします延喜式内住吉神社(社司渡邊繁氏)の大例祭は例年の通り十月十三日行はれる本年の勅使は住吉鈴木勝利さん(好美氏長男)流鏑馬は金成の柳内四郎氏である、宵祭は小名濱海岸で御代砲太郎氏(アデプチ)所有船上で所謂オコリをとる御祭りは住吉青年會員が奉仕する事は例年の通り本年の會長は鈴木友枚氏である區長は高萩政記氏、社總代は山野邊大藏氏外五名である、

因みに同社御由緒略記から由緒沿革をひろふ

由緒沿革

社記の傳ふる所に據れば住時大臣武内宿禰勅命を奉じて東奥巡視の途次東海鎭護の爲め此地を相し西國墨の江三所神を勸請鎭齋し奉りしものなり、即近畿中國以西には住吉神を祀れるも關東、東北には唯一社もなきを慮り石城の地克く衝を得住吉の地能く地利を收むるの故を以てこれ造船の際此の三神海上の船靈なれば夙に關東北、磐城の造船の神として此處、小名濱の邊に航海安全、國家鎭護の爲め大神を奉祀せるものなり、從つて神名を畏み郷を住吉と稱せるなり、延喜式官牒載せる住吉神社全國七社中の一社にして又磐城式内七社の一なり、而して鎭座以來曾て一度も御遷宮せしことなきは蓋し神徳の明顯なる所以なり、昔王道の隆盛なりし時は全く官祭にして勅使參向あり、數ある行事中主なる住吉御田植式、住吉紗、棒獅子舞等あり、名實共に顯著なる神社なりしも時勢の變遷所領の沿革と共に、神宮、六官坊、社家廢滅し別當寺遍照院之を司り社務の權を恣にし以來幾星霜を經、今は二月十三日の春季例祭に十月十三日の大例祭あり、神事として勅使參向式及流鏑馬の儀あり當社の俗に籔亦祭、と稱する馬場に農具市起ちて千客万來の賑ひ年中の調度を此の市に求むるを無上絡喜とするによる。

破邪顯正、啓發運動
關内當らずの眞相
新聞報導人の反省を希むと共に地方人の郷土愛心を啓發す

過般十月一日の衆議院議員改選に當り前自由當福島縣支部長たりし關内正一氏が第三區に於いて何が故に敗れたか、全氏を支持した人は勿論第三者も知りたい事であると思ふ。

一、自他ともに鳩山派として重きをなして居つた、不意打の解散!木村縣支部長として藤さんを立候補のやむなきに致らしめた事、

一、全部立候補してからその戰ひを觀るに自由党石城支部の現職縣議中、蓮沼、馬目は勿論澤田等は高木の松つあん。戰ひ半ば頃小野が關内の代理として應援演說をしながら高木の推薦ハガキを出して居り野崎滿藏氏は藤の推薦ハガキを出す等あり、關内への最も支持者である大平正次縣議が病氣入院中とあり、郡南で星友太郎縣議が光つて居つたが小野一雄が改進黨を看板にして立つあり、赤津縣議は初めから藤をかつぎ居り小野一雄、澤田、赤津の軍に改め圍まれて二進も三進もとれず、正木榮等の酒亂人が狂化したため違反騷ぎを起した(これはこの頃新聞紙上で見た)郡北では上田縣議が鎭重な戰ひをした然し關内は大浦の生れである、かく觀じ來ると一体自由党石城支部で關内一本を推薦した筈なのに自由党石城支部滿場一致が判斷に苦しむ、此處に見逃せぬは好間の大河原茂平前縣議落選者が關内の舌戰の第一線に立つて居つた事は意外でもあり力強いものでもあつた

一、戰ひ初まるとともに、關内陣營の總參謀としていわき民報の社長、平市議の野澤武藏氏の存在であつた。彼は一人で選擧をして居る樣な感をして居り、敵味方を問はず、野澤の存在は關内のマイナスと批評されて居た、何が故に野澤等はかくも嫌はれて居つたのか、實に殘念な事ではある。

一、開けて見て平、石城は良く戰つたが双葉、相馬の二郡から關内へ何票入つたのだ、これに反し鈴木直人が平、石城から何票もつて行つたのだ、齊藤晃さんの話しではないが『發正會の票は社會党に大半行つたのだよ、自由党になんか行くものか、齊藤が辭退しなかつたら松井さんにあぶなかつたよ』だと、次に狂惨党だあれも輸人(郡山から)候補だからこの票も社會黨に走つたのかも知れぬ。

要は關内は石城が地盤でありながら自由黨石城支部縣議中の何名が關内を支持したか、手を揚げて見ろ、而して小名濱も然りだが水野が關内だから、おれは高木だ、どつちへも入れぬから藤だ、鈴木だ、やれ小野だなんて自由党とか、地方とか、國家とかの觀念がなく對人感情で進退をして居つた、伊藤正雄さんの關内への應援演說でないが『湯本平間の國道コンクリー工事は關内が持つて來たのだ、高木の松つあんなんか持つて來れるものか、國會議員は國政、國際關係を料理するのだ、地方の橋をかけたり、野球の世話をするのは縣議か、市町村議員のやる仕事だ』と常磐毎日で盛んに關内は仕事をしないとか何だ彼んだと惡宣傳をして居つたが、これを默つて傍觀して居つた、强口、蓮沼、高木の人となりがあやぶまれる、新聞は事實を報道する事は法の許す範圍で自由である事誰しも知つて居るである事だ、それを自分が造つた事だ、法律をくぐつて候補者自ら戸別訪問をしたり、事實無根を報道して公明選擧たらしむべく努力しつゝある善良な選擧民を迷はしたる如きは新聞に在らずして私聞だ、公器に在らずして狂器だ、平で常盤毎日といわき民報を觀ると漫畫を觀て居る樣なもので、どつちが事實か判斷に苦しむといふ觀があり、引いて小名濱の磐日は中道を步んで居るかと思つて居たら、これ又藤だ續いて福島や東京發行の新聞も事實を確めず前記の三新聞の報道を眞似て報道して居つた事實が遂鹿戰中の報道陣であつた、地方新聞在平各新聞支局、今少し讀者中心にしてウソの報道はやめて欲しい、新聞は心のパンとして必ず必要であることに農村としては一部以上とれぬ經濟狀態だ、探訪記者の努力が足りぬ事は事實がものいふ、選擧公報で關内は『正直者がバカをみない』世の中の實現が私の政治目標である、惡い人間ずるい人間が巾をきかし正直で眞面目で正しい人達が不幸になるような政治を極力排擊し、善良な人々がスクスク伸びてゆけるような政治、社會機構をつくり出すことに全力を注ぎたい』と第一項に强張しておつたが大いに同感である、世には數に於てぜんりようた人がすくない、その私の持論に共鳴して集つた者何人あるか、『濁水に魚すまず』といふ觀はあるが參謀にその人を得なかつたことは事實だ、人の和がなかつた、選擧は戰ひだ、大阪陣でも源平の戰ひでも歷史がものいふ、將の將たる器あつてもその謀將に適格者がなかつた、立候補前の組織がなつていない、敵は相當に事前運動をしておつた事は大衆が知つており、關係している、宣傳が足りぬ、こんどの敗戰で手を叩いて喜んでいる關内事務所へ出入しておつたものでも、ある事を忘れてならぬ、選擧は實に人の心が鏡に寫した如く後日判るものだ、溺れるもの藁をつかむといふ眞理は否めないが、違反を起し公明選擧に犧牲者を出した敗軍の將關内正一氏の心中を想ひ筆者は報道したい幾多の事實と證據を確保しているが敗軍の將兵法を語らずといふが告發の擧に出まい。關内正一氏、畏友としてばかりでなく平、石城地方のため、國家のため第三區から立候補した七人中關内氏が、あらゆる角度から適格者と信じ最善をつくしたが運つたなく敗れた、自由党石城支部幹部諸君の不人情にはあきれてものが言えぬと同時に、石城地方人は傳統的封建時代小濱割據せる精神的遺傳をうけて人を大ならしめない、そねみ!この根情から、他郷人にやられる、これが今回の選擧で事實がものいふて居る、それなのに相馬地方はどうだ直人さんの票がものいふて居る、關内を落した事は地方の大損失であり、石城の人は打算的にみても馬鹿だと他縣の人が言ふて居る

× × ×

關内正一氏の眞の支持者の心情を察すると涙なくして筆を進め得ない……が捲土重來、相互に自重自愛泣いて馬謖を切る慨を示し、いつかは來る選擧に善處せん事を辨ふものである。

數字がものいふ
第三區候補者得点の跡

鈴木　直人	五六、八二一
松井　政吉	九五、〇五三
高木　松吉	四九、一七三
關内　正一	四二、六二五
藤　二雄	一五、四六八
小野　一雄	一一、四一七
植村　鶴吉	五、七四八
以上濱三郡合計	
平市は左の順	
關内　正一	一〇、一八九
高木　松吉	四、二四五
松井　政吉	三、九四三
藤　二雄	七七八
鈴木　直人	四二七
植村　鶴吉	三六九
小野　一雄	三四六
石城郡では	
松井　政吉	四一、八八二
關内　正一	二九、二七二
高木　松吉	一七、三三〇
藤　二雄	一〇、六一七
小野　一雄	一〇、二一九
植村　鶴吉	四、一九一
鈴木　眞人	二、〇九二
双葉郡では	
高木　松吉	三三、八五五
鈴木　直人	四、四一二
松井　政吉	四、四四六
關内　正一	二、八五四
藤　二雄	一、八一七
小野　一雄	五八七
植村　鶴吉	五二五
相馬に入つて	
鈴木　直人	四九、八九〇
高木　松吉	四、七四三
松井　政吉	四、七八二
藤　二雄	二、二五六
植村　鶴吉	六六三
關内　正一	三一〇
小野　一雄	二六五
石城郡内中小野濱町	
關内　正一	三、一二九
松井　政吉	二、九八八
高木　松吉	一、八一四
藤　二雄	一、五四八
小野　一雄	六〇五
植村　鶴吉	二〇四
鈴木　直人	二〇〇

社會党松井は別として高木と關内を比較し觀るに泉、渡邊、錦、勿來、上遠野、入遠野、川部、夏井、豊間、江名、鹿島、磐崎、湯本、内郷、好間、赤井、永戸、箕輪、三坂澤渡、草野大浦、四ツ倉、大野、上下小川、川前は關内が上位であるが、高久、植田、山田田人は高木が上位である。

これで舊玉川から何人が立つてもとれぬ事になつた樣な感がする。

選擧後の注意
後腹いたまぬ樣

一、當選または落選に關し選擧民にあいさつする目的を以て個別訪問する行爲

二、自筆の信書及び當選落選に關する祝辭、見舞などの答禮のためにする信書を除くほか文書圖書を頒布し掲示すること

三、新聞紙、雜誌を利用する事

四、當選祝賀會などの集會

五、自動車を連ね隊伍を組んで任來し氣勢をあげる行爲

六、當選に關する答禮のため當選人の氏名、政黨その他の政治團体の名稱を言ひ步くこと

柳井五郎氏
善く戰へり

小名濱町教育委員選は五日即日開票の結果左記

當選	會田　究	一、九六九
	佐藤　貞吾	一、七九二
	黑澤　廣	一、六二一
	粂松　宏多	一、五〇八
次点	門馬　一	一、二五三
	柳井　五郎	一、二二二
	長瀬芳多郎	九二四
	高瀬　霞	七九

大平縣議
全快した

磐崎村縣會議員大平正次氏は盲腸のため上田外科醫院入院して居つたが去月二十一日退院自宅發療中であつたが全快した。

御進呈

本社は本号に限り無料で讀んで戴きます

平新報社

柳内頴一氏の
(二八會友)
住所判る頗る健在

小名濱町下横町柳内準平氏實弟柳内頴一氏(二八會友)夫人英子さんは此の頃現住所が判つた左記

中華人民共和國瀋陽市南市區北經路十緯路
東北紡織管理局宿舍

住吉遍照院
寺山の境界爭ひ
まとまる

遍照院と同大字住吉の佐藤義一、佐藤吉技兩氏との山林の境界爭ひは係爭中であつたが、今回十月四日平支部裁判長水野小名濱町長代理、助役長瀬國三郎氏、内郷の庄司調停官、大字住吉より區長高萩政記氏外委員拾名が調停の勞をとりたるため永年もめて居つた境界爭ひも圓滿公平に仲直りしたとの事である。

發行所變更

本社は從來發行所を平市二丁目拾番地に置きましたが、今回經營者の住所たる題號下表示の通り福島縣石城郡小名濱町大字岩出字向二十八番地に變更致しましたから誤解のない樣御願ひします

平新報社
山野邊庄吉